白鷗小

探究心をもって主体的に学ぶ子の育成

～子どもが解決したくなる、聞きたくなる働きかけの工夫を通して～（３年計画の１年次）

校長　　古　川　　祐　行

１　研究主題について

(1) 学校教育目標具現化のために

本校では、「生き生きした子」を教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、その具現化のための取組を続けている。教育目標を具現化するためには、県教育委員会の学校教育指導の方針と重点にあるように、「一人一人の子どもが、各教科及び総合的な学習の時間等において、確かな学力を身に付けることができるよう、目指す資質・能力を明確にするとともに、言語活動の充実を図りながら、一人一人の能力・適性に応じた指導と学習習慣の育成に努めること」が大切であると考える。また、子どもが解決したくなる学習課題の設定や「聞き方」「話し方」を意識させた話合い活動を工夫することは、生き生きと学習に向かう子の育成につながり、本校で目指す児童像の実現に迫ることができると考える。

(2) 児童の実態から

昨年度は、児童の思考に「ずれ」を生じさせることにより「問い」を生むことができた。また、観点をもった話合いや意図的なペア・グループ学習を取り入れたことにより、話したいという意欲が向上し、ねばり強く課題に取り組む態度も育成された。

その一方で、「問い」をもたせるしかけづくりは児童の発達段階や理解度に応じて吟味する必要があること、対話の力を育成させるには、まず「聞く力」の育成が必要であることが、課題として挙げられた。

そこで、今年度は研究主題を「探究心をもって主体的に学ぶ子の育成」、副題を「子どもが解決したくなる、聞きたくなる働きかけの工夫を通して」とし、導入から課題設定までの工夫、そして話合い活動の中でも、特に「聞く力」の育成に重点をおいて研究を進めていく。前年度まで積み重ねてきた内容を継続しながらも、自分の力で問題を解決してみよう、友達の考えを聞いてみようとする態度の育成を図ることは、探究心をもって主体的に学ぶ子の育成につながると考える。

(3)「探究心をもって主体的に学ぶ」とは

「探究心をもって」とは、自分が疑問に思う物事について、進んで調べたり深く掘り下げたりし、問題を解決しようとすることである。そのために、自分自身で解決してみたいと思わせるような課題設定の工夫と「聞く力」の育成に重点をおく。特に、昨年度課題として出ていた「聞く力」については、積極的に聞こうとする態度や聞き方のスキルを育てていきたい。話し手が一方的に話すのではなく、聞き手側の反応やつぶやき、感想や意見があることで、初めて対話的な学びが成立すると思われる。各学級に掲示し指導している「聞き方名人」にある態度面に加え、内容を理解して聞くことができたかについても確認しながら進めていく。

２　研究のねらい

探究心をもって主体的に学ぶ子を育成するために、子どもが解決したくなる課題提示の工夫や話合い活動においての「聞く力」を育てるための工夫はどうあればよいか、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

子どもが解決したくなる、聞きたくなる働きかけを工夫することにより、探究心をもって主体的に学ぶ子を育成することができる。

４　研究内容

(1) 導入から課題設定までの働きかけの工夫

ア　児童の思考にずれを生じさせる課題提示の工夫
イ　発問の仕方、内容、タイミング等の工夫
ウ　問題解決意欲を喚起・持続させるための立場の相違や変容を可視化・顕在化する場の設定

(2)「聞く力」を向上させるための手立ての工夫

ア　「聞き方名人」を活用し、反応しながら聞く指導の継続
イ　振り返りの工夫（聞き方・理解度について自己評価、感想の記述）

５　研究の経過

（１）　研究の仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名
11	15	授業研究（５学年）　題材名　平均とその利用 授業者 後藤 博美　　指導助言 総合教育センター 小向 一樹 主任指導主事

（２）　一般研修

月	日	内容・講師・概要等
7	14	クロムブック活用研修「授業で使える一人一台端末の活用」 講師：吉田　悟（本校教頭）
8	22	ＡＥＤ活用研修「ＡＥＤ活用・熱中症対策・応急処置」 講師：丸谷　彩（本校養護教諭）

６　研究の成果

（１）児童の思考にずれを生じさせる課題提示の仕方を工夫することで、児童に問いの意識をもたせることができた。

（２）発問時には、教師主導ではなく、児童のつぶやきや言葉をできるだけ拾うことにより、学習意欲をもたせることができた。

（３）ネームプレート・挙手等を活用して立場の相違や変容の可視化・顕在化をすることで、課題を自分事としてとらえることができた。また、授業への参加意識も高まると同時にしっかりと聞こうとする態度の育成にもつながった。

（４）「聞き方名人」を活用して聞く力の育成に重点をおいて指導したところ、聞く態度がよくなってきた。また、聞いた内容を復唱させることで内容の理解度も上がってきた。

（５）日頃から振り返りの場を設けることにより、自分と友達の考えを比べながら聞くことが増えた。また、自分の頑張りや考えの変容にも気付くようになってきた。

（６）分からない時には意思表示をし、どうにかして理解しようとする児童が増えてきた。

７　研究の課題

（１）児童の思考にずれを生じさせる課題提示では、難しすぎると学習意欲が低下するので、児童の実態をよく考えて焦点化を図るなどして提示する必要がある。

（２）算数の授業において立場の表明をすることは、誤答を選んだ児童が明らかになることがある。よって、誤答児童への配慮が必要である。また、正答・誤答の２択だけで立場の表明をさせることが難しいことがあるので、複数解のある問題提示や解き方について、立場の表明をさせることにも取り組む必要がある。

（３）全体的に聞く力は向上しているものの、反応しながら聞くことや目的意識をもって聞くことなどはまだ十分とは言えない。今後も、繰り返し指導を進めていく必要がある。

（４）話すことに自信がない児童、順序立てて自分の考えを説明することが苦手な児童がいる。今後は、話す力の育成を進めていく必要がある。

（記入者　伊藤　有紀子）